

# まだある、市内の城址・屋敷跡

葛山城址だけでなく、駿東地域には多くの城址が残されています。当時、この地域に城が築かれたのは三武将がせめぎあっていた地帯だったことによります。河東一乱（図1-2）や北条・武田の抗争期（図1-3）、この地域は戦いの最前線となりました。また、現在も東名・新東名高速や国道246号といった幹線道路が市内を通過していますが、戦国時代も足柄路※が通過するなど、交通の要衝でもありました（なお、大畑城址・千福城址は、東名高速や246号バイパス建設時にその一部が削られています）。

下図は戦国時代の城址の位置を航空写真上に落としたものです。裾野市を含む愛鷹山、箱根山の谷あい（長泉町～御殿場市）、多くの城が築かれていたことが分かります。



**千福城址**  
裾野市千福字平山の丘陵上にある城址。平山城址とも。大畑城址とともに、北条・武田抗争期に運用されたと考えられている。

**柏木屋敷跡**  
裾野市茶畑、大場川（境川）のほとりにある屋敷跡。三島（伊豆の国）との境に位置する。かなり低くなっているが土塁が残り、水路として堀が残っている。発掘調査は実施されていない。

## おわりに

図3 裾野市域附近の城址、屋敷跡

足元の歴史と学校で習った日本史のつながりを想像することは難しいかもしれませんが。そのため、裾野の歴史や文化財については、聞いたことはあってもよく分からない、という方も多いのではないのでしょうか。けれど、ちょっと調べてみると、裾野の歴史も「学校で習った日本史」とつながっていることが分かります。裾野市の歴史も日本の歴史の一部ですし、そもそも日本の歴史は地方の歴史をまとめたものと言うこともできるでしょう。

郷土の歴史に興味を持っていただけたら、是非現地足を運び、体感してください。文字で読むより一層リアルに歴史を感じられるはずですよ。

※足柄路：当時のメインストリート。箱根山を迂回する東名高速や国道246号と同様のルートを取っていた。

【編集・発行】裾野市文化財保護審議会・裾野市教育委員会生涯学習課  
裾野市深良435番地 TEL055-994-0145  
発行日 令和7年3月  
当パンフレットは、裾野市公式ウェブサイトで公開中→  
生涯学習センターで配布中



文化財をもっと身近に！  
**裾野の文化財**  
紹介アプリ



# 楽しい郷土史だより Vol.13

回覧

## ◆山城デビュー特集号◆

### 裾野にも城があった？

皆さんは「城」と聞いてどのような姿を思い浮かべますか？天守閣があってお堀があって…、というお城を想像される方が多いのではないのでしょうか。裾野にもお城があるって？そんなお城は見たことない！そうですね。

私たちが「城」と聞いてイメージする、空高くそびえる「城」は、戦国時代末期以降に作られるようになった新しい城です。織田信長によって築かれた安土城がその初めと言われており、石垣をもった「石の城」と言えます。それ以前の城は、山の尾根や丘陵などを利用し、土木作業で地形を改変した「土の城」でした。裾野市にあるお城とは、こうした「土の城＝山城」のことなのです。

通常、こうした山城は平地からかなり高いところに築かれることが多く、見学には体力が必要となります。その点、裾野市内の山城は、立地的にアクセスしやすい、山城デビューにうってつけの城と言えます。また、保存会や地域の方々、ボランティアにより手入れがされており、いつでも歩きやすく、地形を確認しやすく保たれているのです。さあ、裾野で山城デビューしてみましょう！



This is 城郭、松本城



裾野の山城、葛山城址

### その前に…戦国時代の駿東地域

裾野市内に山城が必要となる時代背景はどのようなものだったのでしょうか。

戦国時代当時、裾野市を含む駿東地域は葛山氏が国人領主として治めていました。しかし周辺には、駿河の今川、相模（神奈川）の北条、甲斐（山梨）の武田といった名だたる戦国大名が控えています。そのため駿東地域の支配は、三人の戦国大名の勢力争いやその力関係によって変化していきました。

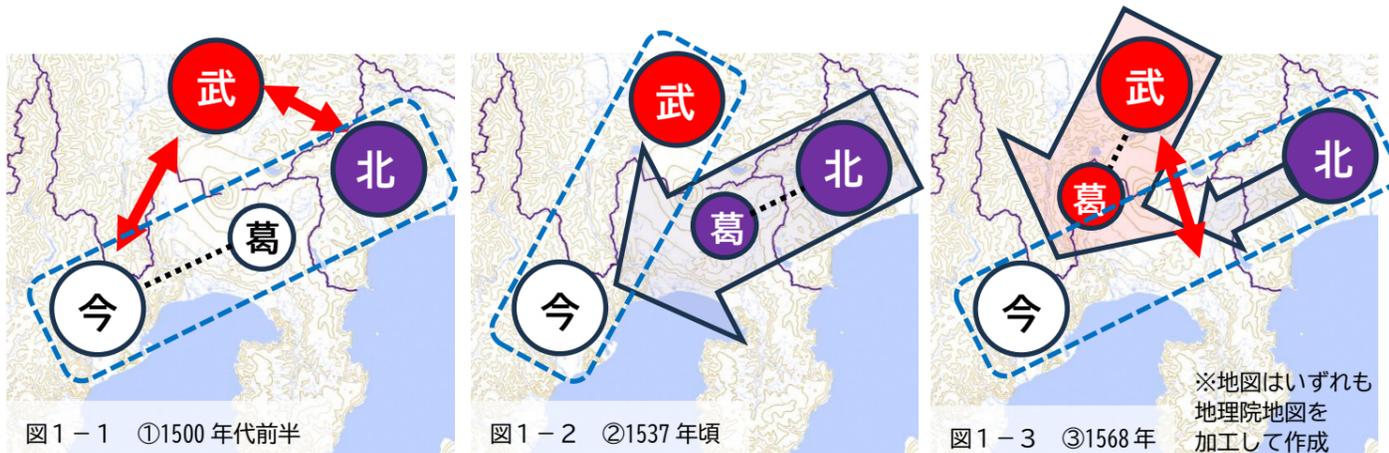


図1-1 ①1500年代前半

図1-2 ②1537年頃

図1-3 ③1568年

※地図はいずれも地理院地図を加工して作成

- ①1500年代前半：今川と北条は友好関係、武田と両氏が衝突。葛山は今川方。
- ②1537年：今川が武田と同盟を結ぶ。北条は今川と断絶、駿河に侵攻（河東一乱）。葛山は今川方から北条方に。その後1554年に三大名による同盟（駿相甲三国同盟）が締結されると、葛山は再び今川に從属、今川・北条・武田間は安定。
- ③1568年：武田信玄が駿河へ攻め入ると葛山は武田に寝返る。駿東地域は今川救援に来た北条が占領。

激しい勢力争いの中、各武将はそれぞれ支配した領地を守り、拡げるために城を築きました。だからこそ、裾野市域を含む駿東地域には山城や砦が多いのです。それでは、次ページから実際の山城を見てみましょう！

# これぞ裾野の山城！葛山城址

所在地:裾野市葛山  
城の規模:東西約350m、南北約70m

築城時期:不明(中世)  
駐車場:あり(仙年寺駐車場)

## かずらやまじょうし 葛山城址 (市指定文化財)

そう言えば子どもの頃遠足で行ったなあ、という方もいれば、初めて聞いた、という方もいるかもしれません。裾野市の山城の代表格が「葛山城址」です。葛山地区は葛山氏の本拠地でした。

葛山城址は愛鷹山の尾根の末端部、愛宕山と呼ばれる丘陵部に築かれています。城址直下まで車で行ける好立地、車は仙年寺様の駐車場に停めることができます。

車を降りるとまず目に入るのが、葛山氏の菩提寺でもある仙年寺です(写真①)。駐車場から7mほど上がった平場に建てられており、かつては葛山氏の居館があった、もしくは「曲輪(くるわ)」※として機能したという説もあります。

本堂の裏手へ回ると、杉や檜の林の中に山頂へ続く長い階段が伸びています。その階段を登り切ったところにも特徴的な遺構があります。谷間のように山を削った、「二重堀切(にじゅうほりきり)」です(写真②、図2黄緑色部分)。東西に延びる尾根筋を断ち切るように設置された堀切は、敵の動きを封じる役割を持っています。元々の地形をV字に掘りくぼめたもので、通常は一本ですが、葛山城ではより強固にするため二重に設置されました。

さて、今度は階段を登り切ったところから左手に進んでみましょう。通路のように見えますが、ここは三の曲輪もしくは横堀と考えられています(図2青色部分)。

※曲輪:山の斜面を削り取り、平面にした部分。本丸にあたる部分を「本曲輪」、他の曲輪を取り囲むように配置する曲輪を「帯曲輪」という。

※遺構:過去の人の活動によって地面に残された痕跡。山城の場合、堀や土塁などのこと。



写真① 仙年寺



写真② 二重堀切



写真③ 縦堀



写真④ 虎口



図2 葛山氏屋敷敷周辺縄張図 (静岡古城研究会 水野茂氏作図を加工)

進行方向左手の斜面にも大きな遺構があります。地面をUの字状にえぐった「縦堀(たてぼり)」です(写真③、図2緑色部分)。縦堀は、攻めてきた敵が斜面で横移動することを防ぐ役割を持っています。葛山城址の縦堀は山のふもとまで延びる長く大きなもので、県内でも有数の規模を誇ります。見逃さないようにチェックしましょう。

西側の二重堀切を観察したら、二の曲輪(図2黄色部分)へ上がります。入口部分には、土塁を鍵の手に曲げた「虎口(こぐち)」が残っています(写真④)。さらに上に登ると、本丸にあたる一の曲輪(図2赤色部分)です。眺めもよく、目をこらすと千福城址(裏面参照)も見えます。この眺望の良さも、城にとっては大事な要素だったのでしょう。

一の曲輪からの帰りがけ、城の背面に回ると4本の「畝状縦堀(うねじょうたてぼり)」が見られます(図2紫色部分)。この畝状縦堀や先ほどの二重堀切は武田系の城によく見られるものです。葛山氏最後の領主は武田信貞(信玄の子)であり、葛山城運用の終盤に武田氏の影響が及んだことが考えられます。

※虎口:城の出入り口。敵の侵入を防ぐため、形状は様々に工夫された。

## かずらやま し きょかん し 葛山氏居館址 (市指定文化財)

その葛山城址から南東400mほどの箇所に、葛山氏が居住したといわれる居館址があります(写真⑤)。戦国時代の武将にとって、山城は戦の時に立てこもるためのもので、日常的には平地の居館に住んでいました。

居館址は一辺約100mの方形で、東・西・北側に土塁が残存しており、南側は大久保川に面しています。北側の土塁は一度削平されたものを復元したものです。北・東側の土塁沿いにはかつて濠があったとされていますが、現在は埋め立てられています。土塁には三か所の出入り口があります。西側南寄りの箇所が本来の門址で、西側北寄り及び東北隅の出入り口は後世に便宜的に開けられたものと考えられています。

平成4年、市史編さんの一環として居館址内南東部の発掘調査が行われました。その結果、多数の柱穴や庭園の一部とも考えられる集石などの遺構、中国産・国産陶磁や金属製品などの遺物※が出土しました。陶磁類の制作年代は12世紀~16世紀にわたっており、居館が安定・継続して使用され、質の高い文化性を保持していたことが分かります。

このような形で城址と居館がセットで残っているケースは珍しく、全国的に見ても大変貴重な遺跡と言えます。

※遺物:遺跡から出土した、過去の人が残した道具などのこと。

※居館址内部は私有地です。敷地内への立ち入りはご遠慮ください。



写真⑤ 居館址内部から土塁を望む